

# 保護者の不安解消

# 医師の負担軽減

ダイヤルすれば看護師のアドバイスを受けられ、保護者にとっては強い味方。救急現場では、緊急性の低い人が救急外来を受診する「コンビニ受診」が問題となっており、県は保護者の不安解消と救急医の負担軽減につながると期待している。

# スクランブル

夜間に子どもの体調が悪くなった時、医療機関に連れていくべきか。こうした保護者の悩みに応える小児救急電話相談「#8000」事業が7月15日から県内で始まった。スタートから1カ月間の利用件数は236件と順調な滑り出しだ。「#8000」に

# 頼れる「#8000」

## 県内 小児救急相談

「熱が出たが、どうすればいいか」「子どもが腹痛を訴えている」。電話相談を担う会社「ダイヤル・サービス」（東京）には夜間、こうした母親からの相談が相次ぐ。対応するのは臨床経験があり、200時間以上の研修を受けた看護師だ。

小さい子どもは、大人のようにうまく症状を伝えられないことが多い。電話対応する看護師は、表情や顔色のほか、「むずかっている」などの機嫌を聞き、症状によって医療

機関の受診を勧める。同社は富山のほか、福島や島根など6県の委託も受けており、担当者は「母親の不安を和らげるような声を掛けることも大切なんです」と言う。

この事業は、救急現場の負担軽減などを目的に、厚生労働省が平成16年度から推進。県内は、各医療圏に小児を診る急患センターが整っていたため、設置していなかった。

小児救急電話相談は、午後7時から翌日午前9時まで毎日利用できる。料金は、県医務課までの通話料のみがかかる。携帯電話からの通話も可能だ。

県は病院や小児科診療所などにポスターを500枚配布し、周知に努めている。ポスターは「みんなで地域の救急医療を守ろう」と題し、子どもの急な病気に困った時は「まず小児救急電話相談#8000を」と呼び掛けている。

県医務課は「積極的に利用してもらい、2次、3次救急の病院への直接受診が減ることが望ましい」としている。

小児救急電話相談「#8000」の利用などを呼び掛けるポスター―済生会富山病院

